

今ご紹介いただきました石川先生ご主宰の研究会に参加させていただきにあたりまして、金沢21世紀美術館が選んだ作品について、まず私、黒澤からご紹介させていただきます。

今スクリーンに映っている作品、《PIKA PIKA PROJECT in KANAZAWA》は日本人の作家、モンノカヅエさんとナガタタケさんのおふたりのユニット、トーチカがつくったものです。

彼らは、1978年生まれ、現在は奈良にお住まいですが、粘土や絵の具といったものと同じくらいにビデオやインターネットといった新しいメディアを自由に使いこなすアーティストたちの世代です。

2005年から《PIKA PIKA》の制作を開始して、世界の各地でワークショップを通じて作品を制作してきています。特に、2006年に制作した作品につきましては、オタワ国際アニメーション映画祭の特別賞と文化庁メディア芸術祭特別賞を続けて受賞して、その後2008年にはフランスで行われましたクレルモンフェラン国際短編映画祭、ラボ部門でグランプリを受賞しております。

具体的には、今ご覧いただいているこれはトレイラー版なので非常に短いのですが、参加者が共同でアニメーションを制作することで、成果品としての映像だけではなく、ワークショップ自体も含めて作品の一部であるという参加型の作品です。

暗闇でカメラのシャッターを10秒間ほど開放しておく間に、ペンライトの光を使って空中に何かを書きつけます。それを写真に撮影して連続再生することでアニメーションとしているものです。

私が初めて《PIKA PIKA》の作品を見たときに、作品制作の過程にワークショップという手法を取り入れているところに強く引かれたんで

すね。アーティストと参加者の多方向コミュニケーションが作品自体にデザインされていて、それによって作品が更新され続けられるのがとてもユニークな点だと思い、2007年に初めて金沢にお招きしました。最初は、2日間にわたって、参加者を募ってワークショップを行いました。その後2008年に金沢に滞在して作品制作をしていただくというお話になりまして、最終的に《PIKA PIKA PROJECT in KANAZAWA》という作品が生まれたという、いわゆるコミッションワークです。

現在、《PIKA PIKA PROJECT in KANAZAWA》は、《PIKA PIKA》のワークショッププログラムをあわせて、金沢21世紀美術館のコレクションとなっております。

2008年の作品には、トーチカ自身が金沢らしさを感じるロケーションを幾つか選びまして、おぼけがまちを歩き回るというコンセプトで、といいましても、おぼけなので足で歩き回るわけではないんですけれども、延べ人数約300名を超える参加者によって数十回のワークショップを重ねて映像作品をつくりました。カット数にしますと、3万枚以上のものがつながっております。

このワークショップを通じまして、途中いろいろと発見もありましたし、今でもそれは続いております。美術家に限らず、美術という創造の場においては、マニュアルにはないゼロからの発想というのは必然だと思いますが、トーチカ自身もそのように考えておまして、事前の打ち合わせというのはほとんど行いません。進行や備品チェックなどを済ませましたら、あとは本当に初めて顔を合わせる人たちとコミュニケーションをとりながら進めていくというものです。事前にそのワークショップ自体をデザインしてしまいますと、ワークショップのためのワークショップのようになってしまっていて、それを超える

ような表現というのがなかなか出てこないというを経験的に彼らも知っているからだと思います。

ただ、先日の公開授業を行いましたときに、ご参加いただいた方々お気づきかもしれませんが、意識的にしないといけない、あるいは訓練しないと技術的にそれが可能でないという場合には、ヒントも含めて手伝うということにはしています。例えば、何か始めに空中に絵をかいてくださいとか、線をかいてくださいと言っても、体が訓練されていないとなかなかできないものです。そういった場合にはヒントなどはお話するようにしています。

《PIKA PIKA》をやっていくうちに、気づいたり、感じたり、あるいは互いに思い悩んだりといったことが出てくると、工夫が始まります。そうするとワークショップ自体、非常に生き生きしたものになります。ただ、これにはある程度長い時間をかけてコミュニケーションをとることが必要です。

《PIKA PIKA》のワークショッププログラムには、最低限のことしか書かれていません。準備するものは3つですし、ハウツーには5項目しかありません。しかも、トーチカ自身がインターネット上でそれを公開しておりますので、実質的には、《PIKA PIKA》は著作権フリーのものであります。このことから考えても、トーチカの作品《PIKA PIKA》において大切なことは、つくり方よりも、時間を共有することで、そこにでき上がってくる表現をすべて受け入れるということにあるのではないかと考えています。

一本一本の光の軌跡が今ごらんになっていただいているように連続したアニメーションの一部になるわけですから、一人で描くアニメーションとは全く違います。互いに一人一人を認める、個人の表現を保障する。もっというと、そ

## 事例発表1 《PIKA PIKA PROJECT in KANAZAWA》

黒澤浩美（金沢21世紀美術館キュレーター） | 木村健（金沢21世紀美術館エディター）



ペンライトの軌跡を撮影・編集する機材。  
デジタルカメラとノートパソコン。



ペンライト。  
先端を様々なカラーフィルムで覆っている。



ナガタ氏から中学生へのレクチャー

のワークショップに参加する人の個人の存在自体を認めるということを前提にしているからこそ、トーチカの《PIKA PIKA》におけるワークショップという手法は極めて現在の有効なものではないかなと思います。

このワークショップに使っているプログラムは非常にすぐれておりまして、これはトーチカ自身が開発したもので、自由に軌跡を描いた後に撮影すると、すぐに自分たちの描いたものをスクリーンに映し出すことができます。5分ほどあれば、数十枚の連続もでき、アニメーションをほとんどタイムラグなしで見ることができるといえるのです。ワークショップで歓声が上がるのは、まさにこの瞬間です。生命のないものが動き出して見えることだけでも驚きです。

今後もトーチカとともに、ワークショップを重ねていく中で、作品の新たな展開が生まれることでしょうし、関わる人、場所、機会などが多様であればあるほど、ハイブリッドな作品に進化する可能性もあります。

さて、ここまで作品の簡単なご紹介をいたしましたので、引き続き当館の教育普及担当の木村健から、先日行われました金沢大学附属中学校の皆さんとのワークショップについてお話しさせていただきます。

先ほど黒澤から紹介がありましたが、例えば《PIKA PIKA》というプログラム、準備するもの

も3つだし、その方法の手順として紹介されているのも5つだというふうで紹介しましたが、今、紹介したDVDのディスクが入っていたパッケージ、これを開けますと、この作品の始まりとしてこのようなことが書いてあります。

「2005年の夏、《PIKA PIKA》は3歳からお年寄りまで参加できるワークショップを開催するにあたって、どのようにしてアニメーションを楽しくつくることができるかを考えた末、生まれました」と書いてあります。

3歳からお年寄りまで参加できる。美術館の中にこの作品をつくるための、プログラムが生まれるための場の考え方は、このようにいろいろあると思います。先ほどご紹介いただいた作品はいろいろな年齢層の人が、また場面も広いまちの中を使ってということでした。その一方で、これからご紹介する形は、石川誠先生にご紹介いただきました鑑賞プログラムの中に、どのようにこの作品の場を実現するかということで、金沢大学附属中学校3年生の選択授業の美術の時間を活用した事例として、これは作家、トーチカとキュレーター、エドゥケーター、そして金沢大学附属中学校教諭の西澤明先生とともに進めていきました。

私木村からは、今皆さんのいらっしゃるこのシアターで一昨日行われた体験の様子をご紹介します。

まず、3年生で選択制の美術の授業を受ける人たちが全員で約40人いました。それを20人ずつの2つのグループに分けて、一度目は昨年7月に行い、2回目を一昨日に行っています。時間は約2時間です。中学生の皆さんが美術館にバスでやって来て、ここで2時間の美術の授業を行いました。当日の流れは、最初にこれまでのプロジェクトの映像をこの部屋で鑑賞しました。このシアターの階段は、全部壁の中に引っ込んで床が平らになるので、この部屋をいっぱいに使って行いました。

その後、アニメーションを自分たちの手で生み出していったのですが、実際にそのために必要な機材はここに映っているように、ごく限られたものです。

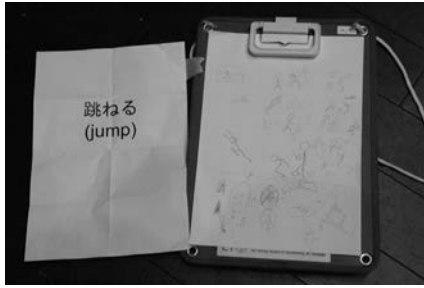
まず、真ん中にカメラが三脚に立っています。そして、懐中電灯を生徒の皆さんが持ち、あと暗い場所としてこの部屋があるわけです。

これが懐中電灯です。懐中電灯の先に黄色、赤といったいろいろな色のフィルターがかかっています。トーチカは2人組のユニットですが、そのお一人のナガタタケシさんに来ていただいて、この体験を行いました。

これは生徒たちが自分たちでも、じゃあまず光の軌跡で絵をかいてみようというプロセスです。みんなで記念写真のようにここに段になって並んで、ペンライトを使って光の軌跡を描きます。それを何度も繰り返し、少しずつ位置や



試作として数コマの繰り返しで「弾むボール」の動画を作る。



グループごとに動きのテーマを決める。「跳ねる」グループが描いた絵コンテ。



映像作品の発表会。「飛ぶ」グループの作品。

形を変えて描き、その画像を連続再生して実際に絵が動く様子を体験して、その後はグループワークになりました。

ここでは、20人の生徒の皆さんが6つのグループに分かれ、グループごとにどのような動きをテーマにするか決めるためにくじ引きをしてもらいました。あるグループは「広がる」、あるグループは「走る」、そのようにくじに書いてあります。例えば「走る」をテーマにどう動くものを描くか。グループに分かれて紙に絵コンテを描きながら、自分たちのアニメーションを考えていきました。

そして、考えがまとまったら、まず試してみようということで、実際にペンライトを持って撮影をします。絵コンテはあくまで参考で、実際に動き始めたらまた全然違う形になっていたりもします。

ここで制作をしているときの様子を動画でごらんいただきますので、ビデオカメラへの切りかえをお願いします。

#### [動画再生]

暗い中で行っているのどこに人がいるのかわかりづらいかもしれませんが、ペンライトを動かしているところです。

右に白い縦長いものが映っているのは紙で、その上にカメラがあります。カメラの後ろのモ

ニターに今撮れた画像が写っています。

10秒間シャッターをあけて、その間光を動かします。それを10枚撮影し、写真を連続的にアニメーションとして再生します。

今、数を数えている声はナガタケシさんの声です。

#### [動画停止]

このように撮影を進めました。これは西澤先生が自分たちの持っているカメラでも同じことができないだろうかと、コンパクトカメラを使ってその機能を確認している様子です。

そしてその場で画像を編集して、プログラムの最後に自分たちの作ったアニメーションを鑑賞しました。このプログラムを通じてできあがった動画を、今からご覧いただけます。

2回の授業を期間をあけて行いましたので、その途中、先生やナガタさんとの打ち合わせを行い、1回目と2回目で進行を変えた部分もあります。

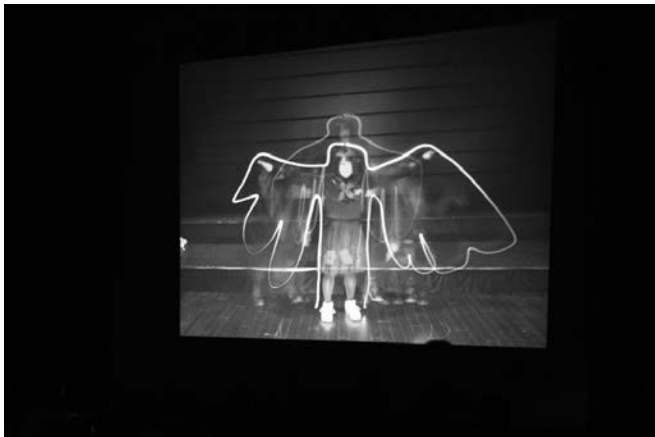
例えば、1回目は20人を2つのグループに分けて行いましたが、そうすると、1グループ10人での制作の時間になります。2回目のときは、それをもう少し細かい人数でできるように6つのグループに分けて行いました。そうすると、3人や4人といった集まりの中で、何がどう動くかを考えるといった話し合いが進めやすくなりました。

また、動画の最後のシーンには全員で「PIKA PIKA in KANAZAWA 2010.1.15」というタイトルと日付を書きました。制作した日付を入れることを、ワークショップをここで続けていくときの決め事としたいということを作家と話し合っています。

こうした《PIKA PIKA》のプログラムでは、まず参加者が最初にこれまで生まれた映像を体験するといった時間があります。ここで自分たちが作った映像が次に参加するグループの人たちの鑑賞体験にもつながり、それが無限に広がっていきます。自分たちが作品と関することで作品の世界が広がって、そこから新しい人によってさらに広がっていくといったイメージを参加者の人に持ってもらうことを目指しています。

以上が中学3年生によるプログラムの内容です。

どうもありがとうございました。



「飛ぶ」グループの作品の別のコマ。  
階段を使って上に飛ぶ動きを演出した。



映像の最後に入れた、  
タイトルと日付のコマの撮影風景。

[参考]

《PIKA PIKA PROJECT in KANAZAWA》鑑賞プログラム

日時：[前期] 2009年7月10日(金) 13:30-15:30

[後期] 2010年1月15日(金)

参加者：金沢大学附属中学校 3年生

前期・後期各20名

講師：トーチカ(ナガタケン)

進行：

[a. レクチャーホールにて]

- ・アーティストと生徒の出会い / 講師挨拶
- ・これまでの各地の「PIKAPIKA Project」で生まれた映像を観る。
- ・映像制作の過程を紹介し、試しに簡単なアニメーションを制作してみる。ペンライトの軌跡で円を描いて撮影し、円の位置や形を少しずつ変えて描いた画像を連続再生するとボールが弾むような動きに見える。
- ・シアター 21 に移動

[b. シアター 21にて]

- ・2グループに分かれて、映像を制作する。(後期は6グループ)
- ・何を描くか、どう動かすか、ストーリーを考えて絵コンテを描く。
- ・アーティストや教員らスタッフも助言しながらアイデアをまとめ、各自がペンライトで描くもの分担を決める。
- ・部屋を暗くし、グループに分かれて撮影する。(10秒露光で20-30コマ撮影)
- ・タイトルとなる「PIKAPIKA in KANAZAWA 2009/07/10 (後期は2010.1.15)」の文字を全員で撮影。
- ・撮影した画像をアニメーションにして再生し、全員で鑑賞した。